シミュレーション

午雲堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シミュレーション

【Ｎコード】
Ｎ８１７３Ｆ

【作者名】
午雲堂

【あらすじ】
一つ上の次元を空想してみました。ゲームを楽しむ三人のもとに予想外の事態が訪れます。幾何学的四次元の世界です。

たとえばあなたが手紙をだすとき、あなたは自分の住所を何と書くだろう。
番地、町名、市名、都道府県名、ここまでは常識だ。
だが世界的視野でみれば、国名も必要になるだろう。
もし宇宙的視野でみれば、銀河系、太陽系、第三惑星地球と書き加えねばならない。
そして、そこは、そんな位置説明を必要とする世界だった。

ここ、三次元ワールド・シミュレーション研究室。
ホーは今日も三次元ワールドの前に座って、シミュレーションゲームに忙しかった。
「おい、宇宙（６・５・４）銀河系（２・０・０）太陽系（４・０・２）惑星（３・０・０）の人口が５０億を超えたぞ！」
「どこだそれ？」
正面であくびしているのは、キーだ。
「地球だ、地球、ホモ・サピエンスの人口が５０億を超えたんだ！」
「ケッ、繁殖力最強のサルなんだから当たり前じゃねえか」
「サルじゃない！」
ホーがイスを蹴って立ち上がった。
またいつもの説明が長々と始りそうだったので、キーは顔をしかめた。
「わかった、わかった、そうか５０億か。ところであれからどのくらい経ったんだ。」
「ええっと、三次元暦で１兆８５３５億２８４７万…」
「わかった、わかった、もうおまえはほんとに細かいんだから…」
「なんだよ、なんか文句あるのか！」
「面倒だから地球暦いや生物暦いや人類暦でいいよ。人類暦何年に

なったんだ。」
「１６５０８年だ。地球は今、お約束の気候変動モードに入ってる。」
「もうそんなに経ったのか。たいしたもんだな。そこまで長続きすりゃあ。」
「へへん、そうだろう。細心の注意を払ってるからな。」
「くそまじめだからな、おまえは…」
「キーがいい加減なんだよ。三次元暦で二万年しか保たないなんて信じられないよ。」
痛いところを突かれてキーはムッとした。
「おれは遊びでやってんだ。趣味なんだよ。おまえとは違うんだ。」
「でもキーだって三次元ワールド作家のはしくれだろう。前の作品ではいいところまでいったじゃないか。」
「うん。でもまあ前と同じ設定じゃ面白くないからな。」
「でもやっぱり超光速ってのは無理だと思うよ。自然の秩序が…」
「うるせい！」
キーがたまりかねて怒鳴り散らした。
「てめえはおれの設定を応用しただけじゃねえか。二番煎じのくせにえらそうにしやがって…」
そこへ、ヒンが現われた。
「まあ、またケンカ？ほんとにあなたたち仲がいいわね。」
「やあ、ヒン。」
ホーがさっそく笑顔を向ける。
「おお、ヒン、今日はまたキレイじゃねえか。」
「今日はね、Ｆ型で決めてみたの。そんな気分だったのよ。」
「そうか。いやァ、ヒンはＦ型の方が似合うってみんな言ってるぜ。」
キーは生き返ったようにニコニコしていた。
「ありがと。ところでね、あの人のＤＮＡどうなってる？」
「ああ、君が注目していたＤＮＡ（Ｍ６４５７）かい？」

ホーの言葉に、ヒンはたちまち嫌な顔をした。
「もう、あの人のこと識別番号で呼ぶのやめてよ。何度いってもわからないんだから。」
「あ、ごめんごめん。癖なもんだから。」
「いま、高橋が活動してるはずよ。高橋どうしてる？」
「ええっと、地球の位置する座標空間のどこかに…」
「リストで検索すれば一発じゃない。ほんとトロいんだから。」
「とろ？登呂、吐露、トロ、寿司ネタのことかい？」
「んもう、あたしは日本人長いんだからつまんないことといわないでよ。つっこみたくなるでしょ。」
「そりゃ、テレビとかいうヤツの見過ぎだな。」
キーが可笑しそうに口をはさんだ。
「しかし、ヒン、すっかりなりきってるなあ、ここの人間とは思えないぜ。」
いわれてヒンはクスッと笑った。
「まあね。あたし、ここにいるより、あっちへトリップしてる時間の方が長いから。気分はすっかり三次元よ。」
それを聞いて、ホーがいたずらっぽく言った。
「もしぼくがこのワールドをクリアしてしまったらどうするんだろう」
「絶対、しないでよ！」
ヒンの眼はすべてつりあがっていた。
「あんたプロでしょ。これでさんざん儲けてるじゃないの。キーみたいになってもいいの？あなたのいうことなら何でもきくからそれだけはやめてよね。」
阿修羅のように迫られて、ホーもさすがにたじろいだ。
「わかってるよ。ぼくもこれで暮らしてる。いまさら顧客に返金なんてできるものか。いままでどおり管理するよ。」
そのとき、キーがはたと身を乗り出してきた。
「そうだ、おれの買った株券、じゃなかった、ＤＮＡはどうなって

る？どのくらい勢力を拡大した？」
「ああ、ＤＮＡ（Ｓ２３）かい？５０年前の戦争で絶滅したよ。」
「なんだって！」
キーは目を剥いた。
「あたしみたいに長期滞在してフォローしてあげないからよ。自然に任せてたら滅ぶのは当たり前でしょ。生存競争激しいんだから。」
ヒンにぴしゃりといわれ、キーも大人しくなった。
「そうだな。いくらなんでもムシがよすぎたな。よし、おれも一丁、本腰入れてみるか。」
そんなキーをみて、ホーは不快をあらわにした。
「おい、三次元シミュレーションは学問なんだよ。バクチの道具みたいに言ってほしくないね。」
「何いってやがる。おれたちのおかげで維持できてるんじゃないか。もっと客を大事にしろ！」
歯をむきだすキーに、ヒンが語りかける。
「あら、わたしはロマンを感じてやってるのよ。おカネは寄付してるくらいのつもりでなきゃ。」
「でも実際ヒンは儲けてるじゃないか」
「たまたまよ」
「たまたまどころか、ヒンの所有権がついてる個体の数を勘定してみろ。いったいいくらあるんだ。」
「ちょっと集計してみようか…」
ホーがデータベースをさぐりだす。
「うーん、繁殖数はかなりの数になるな。成人しているものだけでもアメリカに十五体、イギリスに七体、日本に七十五体、資産総額も相当だし、いいテリトリーをおさえてる。」
「かなり付加価値がついてるから、レンタル料も高いんだろうな。」
「平均株価は５２７５０ポイントだ。」
二人の会話を聞きながら、ヒンは得意そうに微笑んでいた。
「そりゃそうよ。ただハツカネズミみたいに繁殖するだけじゃダメ

なのよ。楽しい人生が送れる個体に仕上げなくちゃ、株価も上がらないのよ。」
「ふーん、そんなもんかな」
キーも感心した様子。
「ヒン、おまえ同じ設定のワールドを造って個人的にも開業してるそうだな」
「研究してるのよ、趣味で」
「えらい力の入れようだな」
「これからはホーのシステムが三次元シミュレーションの主流になると思うわ。いまだかつてこれほど安定度が高くてスリリングなワールドがあったかしら？」
「おい、あのワールドを初めに開発したのはおれだぞ！」
キーがくってかかる。
「あのまま辛抱して続けとけばよかった」
「あの爬虫類なんだっけ？」
「恐竜だ。恐竜に知性をもたせようとして失敗したんだ。」
「そうだったな」
ホーが笑みをこぼした。
「まあ、よくあることだ。おかげで哺乳類をデザインできた。」
「うん。あのデザインは画期的だった。きっとおまえはおれより脳細胞が多いのに違いない。」
キーは自分のことのように熱っぽくしゃべりだした。
「おまえの開発した言語体系もいま考えれば素晴らしかった。あれは手間がかかっただろう。」
「なあに、基本的にはぼくらの言語体系を参考にしただけさ。発声器官が単純だから使える語彙はごく少ないがね。」
「社会性は抜群だし、知的好奇心も旺盛だ。まだまだ知性は発達するぞ。」
「偶然だよ。それに秩序を乱さない程度にヒントは与えてるしね。地球人たちは天の声とか神のお告げとか言ってる。」

「その辺の調整力は天才的だよ。おれは一度地球外生物を使って失敗した。」
「ああ、あれはまずかったね。知性レベルに差がありすぎて人類に継承されなかった。でもその遺跡は世界の七不思議とかいわれて、まだいくつか残ってるよ。」
「あせっちゃダメなんだな」
「ああ、あせっちゃダメなんだ」
キーはそれからヒンに声をかけた。
「ヒン、何やってんだ？」
「物語を見てるのよ」
「ああ、地球人の造ったヤツか。あれはおもしろいな。わかりやすいし。」
「三次元ワールドの芸術は最高だわ。生存競争が激しいからね、きっと。」
「そうだな、寿命が短いからどれも必死になって生きてる。その分、生存本能はマックスにしてあるがね。」
「しかし同類で殺し合うってのはどうもなァ」
「ハプニング要素があっていいじゃないか」
「ミステリーもステキだけど…」
ヒンがふっと虚空を見上げた。
「なによりあたしロマンスが好きなの。いいなあ、地球にはロマンスがあって。」
「ロマンスねえ」
「ロマンスなあ」
ホーとキーの眼にも憧れの色が浮かんだ。
「三次元ワールドは芸術の宝庫よ。いくら脳細胞の数が多くても、この能力だけは太刀打ちできそうにないわね。」
「ああ、ニワトリが金の卵を産んでくれたよ」
「最近じゃこっちでもわざわざ二次元平面に描画するヤツがいるそうじゃないか」

「さあ、ぼくはあまりここから出ないから外のことは知らないがね」
「さあてと。」
ヒンがすっと立ち上がった。
「また三次元にトリップしてくるわ。よろしく、ホー。」
「またかい。さっき帰ってきたばかりじゃないか。」
さすがにホーもあきれ顔だった。
「もう中毒ね。おもしろくて仕方がないの。」
「すっかりなりきってるなあ。で、どの個体を使うの？」
「日本のF型よ。何体ある？」
「またF型かい？よくそう何十年もこりずにF型ばかりできるねえ。」
「F型の方が面白いのよ。特にこれからはF型がおすすめよ。」
そのときキーが決然と立ちあがった。
「よし、おれもいくか。こんなとこにいても退屈だしな。」
「あら、いいわね。やっぱり芸術はライブで味わうべきよ。最高なんだから。」
「うん、まあ…ちょっとそのロマンスってヤツにも興味あるしな…」
「はいはい、好きなだけ行っておいで。こっちも静かでいいや。」
「おれはM型にする。M型の方が資産形成もしやすそうだし面白そうだ。ヒン、一体貸してくれ。」
「いいわよ。その代わりまじめにやってよ。」
「うん。いっぱい儲けていっぱい繁殖してやる。」
「じゃ、テリトリーはどこだ。アメリカか？」
「うん、ああ、日本にする。」
「あなた、わたしの家系に連なる気なの？超高いわよ。」
「イチからなんてめんどくせえ。尻馬にのせてもらうよ。」
「マニアックなイデオムを知ってるわねえ。どこでおぼえたの？」
「キーはギャンブルが好きだからなあ。」
「なんだか心配ね。道楽息子ってヤツになりそうで…」
キーは聞こえないふりをして、ホーに声をかけた。

「どうだ、ホー、おまえも一緒にいかないか。」
「ぼくが？」
「データ整理だけじゃ退屈だろう。たまには息抜きしろよ。」
まごつくホーをみて、ヒンもここぞとあおりたてた。
「そりゃグッドアイデアだわ。わたしが案内してあげるわよ。トリップ経験長いんだから任しといて。」
「しかし持ち場を離れるわけには…」
「しばらく閉めときゃいいのよ。自動モードにしとけばいいわ。そうすりゃ勝手に進んでいくわよ。」
ホーの心もトリップの方へ傾きはじめた。
「そうだな。ぼくもそのロマンスってヤツを体験してみるか。」
「おもしろいわよ。M型にしなさいよ。ふたりでラブストーリーってヤツ作ってみる？」
「ヒン、おまえ病気だな。」
「ああ、ヒンは病気だ。」
ホーとキーはそろってニヤリとした。
「もうなんでもいいわ。善は急げよ、さあ、ホー、手続きしてちょうだい。」

そのときだった。
「やあ、ここかい、三次元ワールドシミュレーション研究室っていうのは」
突然、何者かの声がして、三人を驚かせた。
「失礼、ちょっと噂をきいたもんでね。ちょっとのぞきにきたんだ。」
三人は唖然として虚空の一点をみつめていた。
「姿がないのに声がするってことは…」
「地球でいえば透明人間ってヤツか？」
「なによそれ、どういうこと？」
パニックと化して震えはじめた三人に、また虚空が声を発した。

「いやあ、突然オジャマしちゃって悪い悪い。おれは君たちと同業なんだ。」
「同業？どういうことだ？」
「妖怪か？ゴーストか？」
三人の声は裏返っていた。
「ああ、みえないのは当たり前さ。わたしは一つ上の次元から来たんだ。君たちならわかるだろう。」
声のいうことをホーは素早く理解していた。
「つまり、トリップしてきたということか」
「まあ、そうだ」
声が笑った。
「あんたもいいかげんなヤツだな。物理法則を無視してるじゃないか。秩序が崩れたらどうするんだ。」
ホーは珍しく感情を乱していた。
「いやあ、悪い悪い、ちょっと待っててくれ、出なおしてくるから。」
あっという間に、室内に人間が現われた。
「四次元に変換してきた。これで違和感はないだろう。」
その人物を前にして、三人は血の気もうせる思いだった。
「あんた、四次元ワールドを研究してるのか」
「ああ。君たちと同じようにね」
「では、ぼくたちもアナタたちにデザインされたと考えていいのですね」
ホーの声は震えていた。
「そんなこと気にしなくてもいいよ。そんなこと考えたって世界は何も変わらないんだから。」
「そ、そうよね。」
ヒンが声をしぼりだした。
「ちょ、ちょうどよかったじゃない。あたしたちがトリップしている間、この人にシミュレーションしてもらったら？」

「そ、そうだな。」
キーも錯乱気味に首を振りだした。
「実は私もそのつもりで来たんだ。なにやら面白そうだから、ぜひやらせてもらうよ。」
人物は阿修羅のように笑った。
「じゃ、行きましょうか、ホー」
「行こうか、キー」
「行ってしまおうか、ヒン」
（二度と帰ってくるものか！）
三人は等しくそう思っていた。

（後書き）

四次元の人間がどんな姿をして居るのか、表面が球体なのが四次元の球らしいのですが。読んでくれて、ありがとう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8173f/

シミュレーション

2011年10月22日19時56分発行